
落ちこぼれ魔女と神父様

OL

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

落ちこぼれ魔女と神父様

【Nコード】

N7926Z

【作者名】

OL

【あらすじ】

アリサは人間の神父に育てられた出来損ないの魔女。

魔法使いからは出来損ないとバカにされ、人間からは魔女と嫌われてるけど、優しくてちょっと腹黒いローレル神父に見守られながら一人前の魔女になるため、修行中！

人間が暮らすヘイムダルの森にAランクの使い魔、レッドドラゴンが封印されていると知ったアリサは同級生のデモンを見返すために、レッドドラゴンを使い魔にしようと計画するが。

アリサと赤いドラゴン

深い森の中、湖のほとりの広い野原でティンクは非常に困っていた。

「やめようよ、アリサ」

ティンクは自分が非常に情けない声を出していることを自覚していた。

「今回は大丈夫よ！ちゃんと飛べるわ！」

そんなティンクの言葉に耳を貸さずに、アリサは古い箒にまたがった。

だいたい、ティンクは心配性なのだ。

自分だっていつまでも失敗ばかりしているわけではない。

「また、神父様に怒られるよ。」

失敗すると決めつけているティンクは狐のようにとがった耳を丸める。

「大丈夫よ！ローレルは街に買い物に行っているわ。ちょっと飛んで戻ってくればばれないわよ。」

そういうと、アリサはトウ！っと地面を蹴り上げた。

「ああ・・・」

ティンクは狐のようなしっぽを丸めて、がっくりと肩をおとした。

そもそも、アリサは魔法がへたくそなのだ。

この前、箒の練習をしたときは酷かった。

飛び上がった瞬間、箒はアリサをおいて制御不能に陥った。アリサは箒を必死に走って追いかけたが、箒はアリサの言うことを聞かず、ローレル神父の寝室の窓ガラスを突き破り、ようやく止まったのだった。

今回は上手にアリサを乗せて箒は浮かび上がった。

ティンクはため息を一つつくと、コウモリのような羽を大きく広げ、アリサのそばに飛び立った。

「アリサ、慎重にね。神父さんに練習を止められているんだから。」

箒はきっちり7メートルの高さを保ってゆっくりと前進するアリサをティンクは不憫に思った。

そもそもヘイムダルの森で魔法の練習をしなくてはならないのがおかしいのだ。

本来だったらフレイの魔界学校の校庭で練習するべきことだった。デモンがいつまでたっても魔法が上達しないアリサをからかうから悪いのだ。

「神父に育てられた、出来損ない魔女」と。

そんなことを考えていたとき森の気まぐれな風が大きく吹き上げた。

箒はバランスを崩し、アリサを振り落とす。

ティンクはアリサの服をつかんだが、ティンクの小さな羽ではとてもアリサを支えられなかった。

出来損ないなのは僕も同じだと、ティンクは思った。

黄色い狐にコウモリのような羽の生えた、雑種の出来損ないの使い魔。

地面がどんどん近づく。

ぶつかる――！

つと衝撃に備えた瞬間大きな手がアリサを包む。

「箒の練習をしてはいけないと、教えませんでしたか？アリサ。」

ローレル神父は穏やかな声でアリサに問いかけた。

走ったためか、美しいブロンドの髪が乱れている。

思ったよりも少ない痛みにアリサは恐る恐る目を開ける。
そして、こう思った。

地面にぶつかって気絶したほうが、怖くなかったかもしれないと。

アリサと赤いドラゴン

アリサは痺れきった足をさすりながら口を尖らす。
ティンクはそんなアリサを慰めるように右手に頭を押しつけた。

「あんなに怒ることないのに。」

それでもアリサは唇を尖らす。

「でも、神父様がいなかったら大けがだったよ？
包帯なんて巻いて学校に行ったら、絶対にデモンにバカにされるよ？」

月明かりがほこりっぽい部屋に差し込み、埃がキラキラと光っている。

おれてしまった箒が無惨にドアの脇に立てかけてあった。

「怪我だったら、私の薬湯ですぐに直せるもん。
何も箒をおることはないのに。」

アリサの大きな瞳からあふれだした涙が頬をつたう。
緑色の大きな瞳はまるでヘイムダルの森のほとりの湖のようだ。
ティンクは優しくアリサの涙に鼻を押しつける。

「んふふ、ティンク、鼻が冷たい。」

こうすれば、アリサが笑うことを知っているから。

神父様は礼拝堂で何かを削っていた。

「アリサは寝たのかい？」

礼拝堂に低く優しい神父の声が響く。

「うん。眠ったよ。アリサ、泣いていたよ。」

神父は作業をやめてティンクの方をに目を向けた。

蝋燭の優しい炎が神父の美しいブロンドを照らす。

「私が怒ったからかい？それとも箒がおられてしまったから？」

「両方だと思うよ。ヘイムダルの森で空を飛ばうとしたアリサも悪いけど、神父様も2時間もアリサに正座をさせるなんて。しかも箒を折ってしまうなんて酷いよ。」

ティンクは毛を逆立てて、神父様に抗議をしたが神父は感心がないようにさらに作業に集中していく。

「だいたい、デモンがアリサをいつもバカにするのがいけないんだ。人間に育てられた出来損ない魔女って。学校の校庭で練習をしようとする、いつも仲間を引き連れてまだ空もまともに飛べないのだから、みんなで笑うんだ。」

だから、アリサはヘイムダルの森でしか魔法の練習ができないんだ。

「

蝋燭はゆらゆらと炎を揺らしながらあたりを照らす。

神父はなにも言わずに黙々と作業を進めていた。

ティンクは沈黙に耐えられなかった。

「神父様が心配するのもわかるよ。

アリサは魔法がへたくそだし、もしも湖に落ちていたら大変だ。それに人間にみられたらまた石を投げつけられて、アリサはとっても傷つくだろうし。。。」

ティンクの耳は、声と一緒に小さく丸まっていく。

「できた。」

ローレルはパチンと、糸を切ると立ち上がる。

ティンクの緑色の翡翠のような瞳が蝋燭に照らされてキラキラと輝いた。

「神父様、それってアリサの箒？」

ローレルは職人が作ったような美しい流線型の箒と、蝋燭をもって礼拝堂からでると、アリサの部屋に向かう。

「人間の作った掃除用の箒ではコントロールが難しいのは当たり前だ。前々から作ってやらなくてはと思っていたんだ。今度からは、私がいるそばで練習するようにとアリサに伝えなさい。」

ローレルはアリサの部屋におかれた無惨におれた箒の隣に、新品の箒を置くと泣きつかれて眠ってしまったアリサに毛布をそっと掛ける。

桃色の頬は涙に濡れてじつとりと熱を持っていた。

冷えた礼拝堂で作業していたため冷たくなったローレルの手が気持

ちいいのか、アリサはその手に頬を押しつける。

「この甘えん坊の魔女に、神のご加護を。」

銀色の月はローレルとアリサを優しく見守っていた。
ティンクもアリサの足下に丸くなる。

明日はアリサが笑ってくれるといいなと思いながら。

アリサと赤いドラゴン

アリサは魔法使いの町フレイの魔界学校に通っていた。

魔法使いの町フレイに初めて来た時、アリサは何もかもがトンチンカンなこの町に酷く驚いたのだった。

素朴な人間の町ヘイムダルのに更に奥地である、ヘイムダルの森のほとりに住んでいたアリサにとって、魔法使いの町は驚くほど都会であつた。

空から地面に伸びる高層ビルの真ん中を魔法のトレインが走り、箒が走りかう高速道路は風の影響がないように魔法のガラスカプセルで覆われていてその中をいくつもの箒が流れ星のように走っている。交通安全のために、箒には反射版をつけなくてはいけないのだ。

アリサはフレイとヘイムダルの境にあるヘイムダルの森の木の幹から、フレイの魔界学校に通っていた。

どうしても、ローレルと住み慣れたヘイムダルの森から離れ、空中に浮く都市フレイに住む気にはなれなかったのだ。

そんなアリサを、デモンはいつもバカにした。

「出来損ないの魔女」と。

デモンはその日、Bクラスの使い魔ヘアリージャック種のレディを使いこなし、その日の課題であるドワーフの髭を手に入れた。

レディーは黒く美しい姿態で大きなドラゴンの羽を持つ最も美しい使い魔と呼ばれる種族の純血種だ。

もちろん、アリサも課題のためにティンクと健闘したが、ドワーフの小槌に叩かれ動けなくなったティンクをレディーが助ける形でデモンは課題を達成した。

ティンクに小槌で立ち向かったドワーフもレディーの牙にはひとたまりもなかったのだ。

先生はデモンのことをクラスで一番優秀だとほめたたえていた。アリサは授業が終わっても黙って下を向くよりほかなかった。

「ごめんね、アリサ。」

薬湯をちびちびと舐めながらティンクはアリサに謝る。自分をもっと強い使い魔だったら、アリサがバカにされることはなかったのに。

「うん、たとえばティンクがドワーフを捕まえても私はきつとドワーフの髭を切ることはできなかったわ。」

アリサは校庭の裏にある魔法の畑のそばにウサギが掘るような小さな穴を掘る。

しつかりと土が軟らかくなるまで、掘っていく。

アリサの大きな目には、また涙の湖ができているが、今度はそれがこぼれることはなかった。

「私も薬湯を作るのに、ドワーフの髭も、トカゲのしっぽも、ピクシーの羽も使っているわ。」

動かなくなったドワーフをフレイの雑貨屋さんで買ったお気に入り
のハンカチで優しく包むと、穴にそっと横たえる。

「でもね、自分でドワーフの髭を切ることはできないわ。
私はとっても弱虫の、出来損ないの魔女なのよ。」

小さな穴に土を戻しながらアリサはそういった。
ティンクはアリサの薬湯でほとんど痛みがなくなった傷を早く治る
ようにペロペロと舐めた。

「本当に出来損ないの魔女だな。」

誰もいないと思っていたのに、後ろから突然デモンに話しかけられ
て、アリサはびっくりした。

「髭を切られたドワーフの為に、いちいち墓を作るなんて。だから、
人間って奴は土地を有効活用できないのさ。」

魔法の世界では墓なんて、存在しない。
そもそも、魔法使いは死なないのだ。

永遠の命を手に入れてこそ一人前の魔法使いになれる。
卒業までに永遠の魔法の命を作り上げるために魔界学校はあるのだ。

「おまえみたいな雑種の使い魔しか操れないような出来損ないが、
畑に変なもの埋めるなよ。」

アリサが優しく盛った土を踏みしめながらデモンは笑う。
アリサは悔しくて下唇をぎゅっと噛みしめた。

レディーはデモンの方を見るでもなく念入りに毛つくろいをしてい

る。

ティンクは情けないやら悔しいやらで自分のしっぽが大きく膨らんでいくのを感じた。

すっかり暗くなったヘイムダルの森を突き進みながら、
アリサは怒っていた。

「酷いわ。本当にデモンなんて最低。絶対に見返してやるんだから。」

ティンクはコウモリのような小さな羽をパタパタさせながら、アリサのそばを飛ぶ。

「どうやって？ 実際アリサには僕みたいな雑種の使い魔しかないじゃないか。」

アリサは立ち止まると、ティンクに向きなおる。
ティンクの鼻もとに指をビシッと突き出すと、

「ティンクは立派な使い魔よ！」と高らかに宣言する。

だから、ティンクはアリサが好きなのだと思う。

「そうだわ！ Aランクの使い魔を召還して従わせればいいんだわ。そうしたら、ティンクはAランクの使い魔より上のランクになるじゃない！！」

アリサが突拍子もない思いつきをしなければもっと好きになるのに、とティンクは思った。

アリサと赤いドラゴン

デモンはレディーの毛繕いを手伝ってやりながら鬱々とした気持ちを隠せないでいた。

今日だって、あんな風にアリサに言うつもりはなかったのだ。ただ、ドワーフの髭をためらいなく切ったことを責められた気分になってしまったから、アリサに当たってしまったのだ。

あの、出来損ないの魔女になんと思われてもいいはずなのに。ドワーフの髭を切ることなんて、魔法界じゃふつうではないか。

人間だって、ウサギの皮を剥いでその肉を食べるというのに。

ただ、アリサの美しい緑色の瞳に涙が浮かんだことに我慢がならなかったのだ。

デモン、すごいと言いつてほしかったただけなのだ。

そもそも、アリサはこのフレアの町では異例すぎる。

フレアの町では厳しく出生制限がされている。

一人前の魔法使いは永遠の命を手に入れるため、死なない。そのため、好き勝手に人口を増やしてしまうと統率がとれなくなってしまうのだ。

昔は人間の住む町、ヘイムダルを制服しようとした魔法使いが大勢いたらしい。

しかし、魔法を使うのに向かない辺鄙な町は人間を虐殺してまで住む価値はないと判断した魔法使いたちは、出生を厳しく制限することで、人口を保っていた。

一人前の魔法使いは永遠の命を手にするが、そうでない魔法使いたちは、毎年何名か命を落としていく。

そのほかにも魔法使いは死なないが、殺すことはできる。

そうしていなくなった魔法使いを補充するため、子供がほしい魔法使いと魔女は政府に出生願いを提出し、受理された夫婦のみが子供を授かることができるのだ。

デモンは魔法史の教科書を本棚に戻すと、櫛の木でできたベッドに潜り込む。

レディーはすでに自分のベッドで熟睡していた。

アリサはその出生届けに載っていない子供だった。

ある日、美しいブロンドの人間の神父が赤毛の魔女を連れてフレイの町にやってきた。

人間がフレイの町にやってくることは滅多にない。

力のない人間は我々の魔術をおそれているからだ。

デモンは神父に手を繋がれて、弱そうな使い魔を抱きしめたアリサから目が離せなかったのを覚えていた。

そんな自分を悔しく思っている。

出来損ないの魔女のくせに目が離せなくなるのだ。

屋根裏部屋の中をランタンが明るく照らす。

アリサはランタンの明かりを調節してから、目当ての本を探し始めた。

「アリサ、また神父様に怒られるよ。」

ティンクはランタンの周りをうろうろしながらアリサに忠告をする。昼にドワーフにめちゃくちゃに叩かれた傷はすっかり癒えていた。アリサの作る薬湯はすごいのだ。

人間たちもこの薬湯を求めて神父の元を訪れる。

アリサの作る薬湯には群がるくせに、アリサ自身には酷い言葉と差別を投げつけるのだ。

だが、アリサは文句も言わず、神父に薬湯を作って渡している。

「大丈夫よ。ローレルは今、礼拝堂にいるし。ちょっと古い本を探すだけだもの。」

アリサはそういつて、本を出したりしまったりしている。

その古い本から発せられる埃にティンクは思わずくしゃみをした。

「ティンク、見て！これよ！」

アリサは赤い表紙に金の糸でタイトルがかかっているその重厚な本を見つけた。だした。

「昔、ローレルに読んでもらったのよ。」

ヘイムダルに古くから伝わる物語よ！

ローレルはただの伝説だって言っていたけど、これはきつと実話なのよ。」

アリサは赤い本を開くと読み始めた。

「むかし、ヘイムダルの森の奥には、レッドドラゴンがいた。凶悪な種族のレッドドラゴンが住む森には誰一人近づかなかった。」

アリサは声に出して伝説を読み上げる。

「しかし、森の中の食べ物を食べ尽くしたレッドドラゴンは、いつしかヘイムダルに降りてきて人間を食べるようになっていった。

そこで、町の神父ダエグは立ち上がった。

ダエグ神父はその強大な力でドラゴンをヘイムダルの三本杉の真ん中の洞窟の中に封じた。

そして、神父は代々ヘイムダルの森に住みドラゴンと、魔法使いの魔術からヘイムダルの町を守るようになった」

アリサは物語を読み進めるにつれ、自分の声が小さくなるのを感じた。

魔法使いは昔ヘイムダルの町をドラゴンと同じ様におそっていて、神父はそこから人々を守るために結界を張りこの森に住んでいるのだ。

ローレルも本当は魔法使いが嫌いなかもしれない。

アリサは自分の右の太股に手をふれる。

ランタンの光は太股にくっきりと浮かび上がっている魔法使いの紋章を照らしだしていた。

アリサと赤いドラゴン

「屋根裏部屋には勝手には言ってはいけないよと言わなかったかい？　アリサ。」

アリサは太股においていた手を離すと膝の上の本を背中に隠した。

「捜し物をしていただけたもの。行こう、ティンク。」

そういつて梯子から降りようとしたアリサの足を神父は引っ張る。

アリサはバランスを失って、ローレルに飛びかかるような格好で梯子から落ちた。

「何をするの！　危ないじゃない。」

アリサは思わずローレルの首にしがみつく。

最近抱きつくことがなかったが、昔はこの大きな腕に閉じこめられるのが好きだった。

「箒にまたがって7メートルの高さを飛び回っている、じゃじゃ馬が何を言っているのやら。」

また、悪さをたくらんでいたらしい。」

ローレルは足下に落ちたヘイムダルの伝説を書き記した赤い本を、アリサを右腕に抱きしめながら器用に左手で拾い上げる。

「別に何もたくらんでいないもん。」

ただ、昔の本が懐かしくなったただけだもん。」

アリサはローレルの首に抱きついたままローレルの肩に頭を押しつけた。自分の安心する場所を見つけるために。

ローレルはアリサを降ろすことなく廊下を歩き始める。

ティンクはランタンを口にくわえると、ローレルの足下を照らすように飛んだ。

神父様はアリサが読み上げる物語をどこから聞いていたのだろうと、ティンクは考えた。

神父様は魔女だと自覚する前のアリサにいろいろな本を読んでやったが、赤い本にかかれている、魔女狩りの話や魔法使いの火あぶりの話などは決して読んでやろうとはしなかった。

しかし、アリサは自分が魔女だとは知らずに過去の名だたる神父や、英雄たちが魔法使いや、怪獣たちと戦った物語を好んで神父にねだっていた。

そうするとローレルはアリサは仕方のないおてんばですねと、アリサを今みたいに抱き上げて眠るまで歌を歌ってやったのだ。

ティンクはこの幸せな時間がどうしてもずっと続かないのだろうと思った。

アリサは鏡の前で豊かな赤毛を梳きながらローレル神父に赤い本を返してもらっていないことに気がついた。

でも、アリサには明確な目標があった。

子供の読む伝説の中に赤いドラゴンの封印を解く方法など、書かれていないだろう。

アリサはそればかりを考えながら眠りにおちた。

アリサと赤いドラゴン

「屋根裏部屋には勝手には言ってはいけないよと言わなかったかい？　アリサ。」

アリサは太股においていた手を離すと膝の上の本を背中に隠した。

「捜し物をしていただけたもの。行こう、ティンク。」

そういつて梯子から降りようとしたアリサの足を神父は引っ張る。

アリサはバランスを失って、ローレルに飛びかかるような格好で梯子から落ちた。

「何をするの！　危ないじゃない。」

アリサは思わずローレルの首にしがみつく。

最近抱きつくことがなかったが、昔はこの大きな腕に閉じこめられるのが好きだった。

「箒にまたがって7メートルの高さを飛び回っている、じゃじゃ馬が何を言っているのやら。」

また、悪さをたくらんでいたらしい。」

ローレルは足下に落ちたヘイムダルの伝説を書き記した赤い本を、アリサを右腕に抱きしめながら器用に左手で拾い上げる。

「別に何もたくらんでいないもん。」

ただ、昔の本が懐かしくなったただけだもん。」

アリサはローレルの首に抱きついたままローレルの肩に頭を押しつけた。自分の安心する場所を見つけるために。

ローレルはアリサを降ろすことなく廊下を歩き始める。

ティンクはランタンを口にくわえると、ローレルの足下を照らすように飛んだ。

神父様はアリサが読み上げる物語をどこから聞いていたのだろうか、ティンクは考えた。

神父様は魔女だと自覚する前のアリサにいろいろな本を読んでやったが、赤い本にかかれている、魔女狩りの話や魔法使いの火あぶりの話などは決して読んでやろうとはしなかった。

しかし、アリサは自分が魔女だとは知らずに過去の名だたる神父や、英雄たちが魔法使いや、怪獣たちと戦った物語を好んで神父にねだっていた。

そうするとローレルはアリサは仕方のないおてんばですねと、アリサを今みたいに抱き上げて眠るまで歌を歌ってやったのだ。

ティンクはこの幸せな時間がどうしてもずっと続かないのだろうかと思った。

アリサは鏡の前で豊かな赤毛を梳きながらローレル神父に赤い本を返してもらっていないことに気がついた。

でも、アリサには明確な目標があった。

子供の読む伝説の中に赤いドラゴンの封印を解く方法など、書かれていないだろう。

アリサはそればかりを考えながら眠りに落ちた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7926z/>

落ちこぼれ魔女と神父様

2011年12月31日19時51分発行